

進路情報

令和7年度
第5号

DREAM

岡崎盲学校
進路指導部
編集・発行

【ふれあい発見推進事業をとおして】

小学部教諭

1 ふれあい発見推進事業とは

この事業は、特別支援学校における「キャリア教育推進事業」として、小学部6年生を対象に行われています。目的としては、学校近隣の商店、工場などで「働く人」の見学をすることで、身の回りの仕事や働く人に興味・関心をもつことです。



今年度は「V·drug 上地店」に行きました。「V·drug 上地店」に行った理由は、みんなの先輩である岡崎盲学校の卒業生が働いているからです。そこで、先輩へのインタビューをしたり、普段なかなか立ち入ることができないバックヤードも見学したりしました。

2 インタビュー、見学を通じて

まず、先輩へのインタビューでは、「仕事のやりがいって何ですか?」や「大変なことは何ですか?」といった、仕事全般に関する質問がありました。先輩からは、「お客様との関わりにおいて、楽しさと大変さの両方を感じる」との答えでした。次に「高校何年



生にV・drugで働くと決めましたか?」の、進路実現に向けた具体的な質問では、先輩からの「高校2年からここで働くと考えました」という答えでした。高校2年で、進路について決めなきやいけないということも分かりました。先輩から直接教えてもらうことで、進路について考える貴重な機会になりました。

次に、バックヤードの見学です。普段は立ち入れないバックヤードも今回特別に見学させていただきました。身長よりも高く積まれたペットボトルや、段ボールいっぱいに詰め込まれたさまざまな日用品がありました。「ドラッグストアの裏側にはこんなたくさんものがあるんだ」といった、驚きの感想でした。



最後にお客さんとして買い物をしました。事前に決めておいた商品を探すところから始まります。好きなお菓子や家族から頼まれたラップ等、店内を探しました。案内板を手がかりにしたり、商品を手にとって確認したりして、商品の配置も勉強になりました。そしてレジでの支払いもありますが、児童の感想は、「まず商品を探すのが大変」とのことでした。自分で買い物する経験も大切です。

3 さいごに

今回のふれあい発見推進事業では、V・drugの見学やインタビューを通して、仕事を知るだけでなく、進路について考える機会となりました。5年後、10年後先の進路を考えるにあたり、今回のV・drugでの学びはとても小さな一歩かもしれません。しかし、「ちりも積もれば山となる」ということわざがあるように、どんな小さいことでも、毎日積み重ねていくことが将来につながると思います。自分の夢に向けて、小さなことでもいいので、何か始めてみてはいかかでしょうか。

【令和7年度 普通科進路講演会を終えて】

高等部普通科教諭

10月9日、普通科の生徒を対象とし、進路講演会を行いました。この講演会は、「視覚障害分野の専門的な知識・経験をもつ講師を招き講演を聞くことで、生徒の勤労観・職業観を育成し、将来を見据えた進路に結びつくようにする」ことを目的として、毎年、進路指導部で企画・実施しているものです。

今年度は、夏季事業所見学でも関心の高かった「盲導犬」をテーマに、名古屋ライトハウス情報文化センターより、寺西 美代氏をお招きしてご講演をいただきました。寺西さんは、盲導犬ユーザーとして長年、生活されており、歴代3頭目となる「ティファニーちゃん」と一緒にご来校いただきました。



お話の中では、盲導犬が身に付けるハーネスなどのアイテムに生徒が実際に触れたり、盲導犬との歩行を体験させていただいたりして、体験的な活動も交えて講話をいただきました。

具体的には、移動時の盲導犬の役割として、①角を教える。②段差を教える。③障害物を教える。という3つの役割を担っていること。盲導犬は、色を区別できないため、視覚障がい者用の「盲目用信号」のないところでは、盲導犬に頼らず、自身が様子や音で判断していることなどのお話があり、盲導犬が目的地まで上手に連れて行ってくれるわけではなく、共に生活するユーザーとの多くの訓練と信頼関係、そして日々の地道な共同作業によって成り立つものだということを生徒と共に学ぶことができました。

また盲導犬の他にも、身体障がいのある方の補助をする「介助犬」「聴導犬」が活躍していることなど、幅広くお話をいただきました。また、盲学校高等部からの進路選択では、大学進学について悩み、先に卒業した先輩からの助言を受けて大学進学を決めたことや、ライトハウスへの就職に至るまでのご経験など

をお話いただき、生徒たちは、自分の将来の生活に思いを馳せながら、人生の大先輩としての寺西さんのお話に聞き入っている様子でした。最後に、講演会を終えての普通科生徒4名の感想を紹介します。なお、今回の講演については、ビデオ収録をしていますので、当日参加できなかった保護者の方で視聴したいという場合は、担任を通して進路指導部までご連絡ください。

【講演を聞いての感想①】 高等部普通科1年生

今回、盲導犬のお話を聞かせていただいて、前よりも盲導犬のことを知ることができました。ハーネスを付けているときは、盲導犬は仕事中だということを初めて知りました。また、歩く体験をさせていただき、まっすぐ進めて、しかも何回も歩くことによって、慣れているということを知れて、すごいなと感じました。

以前、盲導犬は静かに待つことができ、吠えないと聞いていましたが、本当に静かにすることができるすごいと思いました。他にも、いろいろなお話を聞いていただき、盲導犬のすごさを感じることができました。

【講演を聞いての感想②】 高等部普通科2年生

私は歩行体験を通して、いろいろなことを学びました。お話を聞いて、盲導犬のお世話が大変だと知りました。また、ティファニーちゃんのすごいと思ったところは、段差があるとすぐに立ち止まってくれるところ、指示通りに動いてくれるところ、私たちの目になってくれるところなどです。私も将来、歩行のときに盲導犬を持ちたいと思いました。

【講演を聞いての感想③】 高等部普通科2年生

今回は盲導犬について、お話しを聞くことができました。僕は盲導犬を直接見るのは初めてでした。そのため、盲導犬との触れ合い方や歩き方などを知ることができました。今回のお話を聞くまでは、盲導犬となら好きなところに行けると思っていましたが、実際に盲導犬は初めての場所に行くのは難しいこと、そして、練習を重ねて慣れ



ていく必要があるということも分かりました。それも今回、実際にティファニーちゃんと歩いているのを見て感じました。僕も盲導犬と色々なところを歩いてみたいと思いました。これから盲導犬をもっと知っていきたいと思いました。たくさんのことを探ることができ、とても有意義な時間になりました。盲導犬について知れて良かったです。

【講演を聞いての感想④】 高等部普通科3年生

進路講演会では、寺西さんの経験からたくさんの進路があることや、盲導犬のお話では、盲導犬を飼うことによってたくさんのメリットがあることが分かり、理解を深めることができました。寺西さんの生き立ちについてのお話では、理療科や大学、電話の取次ぎの仕事やライトハウスでの仕事など、様々な進路があることが分かりました。私は、視覚障害のある人が、電話の取次ぎの仕事に就いていることを初めて知りました。

盲導犬のお話では、寺西さんが長い間盲導犬と共に生活していて、良かったことや、誤解されていること、困ったことなどを実体験を交えてお話ししてくださいました。とても分かりやすく、クイズのときには、私も盲導犬について誤解があったことが分かり、学び直す良い機会になりました。

今回教えていただいたことを忘れずに、これから自分の進路に生かしていきたいと思います。



【宝島】

高等部理療科教諭

みなさんこんにちは。先日行われた文化祭は一昨年と同様に大変盛り上がりましたね。私も音楽部の皆さんとともに舞台に立ったのですが、今年の文化祭はこれまでにない緊張感を味わいました。みなさんはいかがだったでしょうか。練習の成果が十分発揮できて満足できた方や、家族や友人からの感想にうれしい気持ちになれた方などがいたことでしょう。

前回の宝島で専攻科に進学できたところまでやっとたどり着いたのですが、今回は文化祭の思い出を書いてみようと思います。「それって進路と関係あるの?」と思う方もいらっしゃるかもしれません、私にとっては文化祭から学んだことは現在の社会生活でも大変役に立っています。ですから進路に直結しているわけではありませんが、少しまとめてみたいと思います。

文化祭の思い出（番外編）

私が人前でしかも舞台の上で劇を演じたのは、幼稚部が最初でした。それは文化祭ではなく、学芸会でした。「みにくいアヒルの子」のアヒルが私の役でした。みなさんストーリーについてはよくご存じだと思います。当時名古屋盲学校の幼稚部には私を合わせて7名が在籍していました。他の同級生よりも体が大きかったので、他のアヒルの子とは違う役がはまっていたのでしょう。決して「みにくい」わけではなかったと思います。この時に私にとって大きな課題となったのは、舞台の上を大きく回りながら歩いて、独唱するという場面でした。先生が足で確認してわかるマットを引いてください、それを頼りに歩きました。舞台の前端には点字ブロックも敷設されていたので落ちる心配はなかったのですが、なるべく舞台の前



にも出てくるよう指示されました。もちろん現在のようにマイクが使えるわけでもありませんでしたから、大きな声を出し、足でマットを確認しながら、不自然にならないように動くことを指導されました。これらの指導は当時の私にとって、大きな課題でした。現在では視覚障がい者の歩行といえばまずは「白杖」が連想されます。私も白杖の使い方を指導されたのは小学部4年生のときでした。ただし、私のような全盲生が白杖を使って歩行するためには、それまでにいくつか身に付けておくべきことがあり、それに対する指導の一つだったのかもしれません。計画的に行われていた指導ではないと想像されますが、生活の中にそれらを身に付ける場面がちりばめられていたように思います。

簡単に説明しますと、最初に体のバランスを保つための筋力をつけることが目標の一つになっていたと思います。人間が並行バランスを保つためには視覚からの情報が大切であることをみなさんはご存じでしょうか。試しに両足をそろえて立ち、目を閉じてみてください。しばらくすると、ふらついてくる感覚があるのではないかでしょうか。もし「特に何も感じない」という方は、片足立ちになってみてください。今度は間違いなく立っていられなくなると思います。ところが、閉じた目を開くと難なく片足立ちもできます。弱視生の方はどうなのでしょうか。このように体の平行バランスを保って歩くことは、視覚障がい者にとっては難しいことなのです。これをカバーするには、ふらついてもそれに耐えるだけの脚力、つまり筋力が求められます。わずかな段差につまずいても、平坦な地面でなくとも、それに影響されないだけの強い脚力は必要です。ほかにも、太陽から自分の方向を知ったり、風の当たり具合で空間を認知したり、匂い、音などから自分が置かれている環境を認知するための情報を整理することは、白杖を持参して歩くための基礎となります。学芸会や運動会などの行事だけではなく、遊びの中で丸太の平均台の上を歩いたり、積み木やブロックで何かを作ったり、現在のようにゲームがなかった当時は体を使って遊ぶことが多く、それが自然といろいろな力となっていったように思います。残念ながら当時ゲームがあったのなら、パソコンの操作や頭を使うことは、もう少し物になっていたかもしれません。

さて、文化祭の思い出に話を戻します。小学部では「おおかみと七ひきのこやぎ」のおおかみ、中学部では「ごんぎつね」の兵十など、みなさんがよくご存じの題材もありましたが、劇を通して初めて知る作品もありました。それぞれにいろいろな思い出があります。セリフを覚えて演じることの楽しさを知ったということだけではなく、私にとってはほかにも得ることがたくさんありました。



劇中では会話をする場面が多く出てくるのですが、会話をするときには相手の方を向いて、もしくは顔をきちんと相手に向けて会話をするという、最もコミュニケーションでは基本となるスキルを身に付けることができました。視覚障がい者同士、特に全盲同士で会話をするときにはもともと相手の目を見て話す必要がありません。当然ながら、健常者の方がお互いに目を見て話すことなど、教えられなければ知る由もありません。他にも身ぶりや手ぶりも演じるために指導されて、初めて知ることになりました。考え込むときに首をかしげることや指をさして方向を示すことなど、いわゆる自然な動きも劇を通して知ることができました。もちろん普段の生活の中では劇のような大げさな動きをすることはかえって不自然なことになりますが、それを知らなければきっと私のふるまいは健常者には違和感としてとらえられていたかもしれません。もちろん現在の私が自然な行動をしているように見えるかといえば、そこには自信がもてません。また人ととの自然な距離についても知ることができました。これは今でも困ることがあります。場所に応じてその距離は変わるもの、自分は会話している相手と適当な距離が保てているかが不安になります。一方で、列を作り並ぶときにも距離の取り方に戸惑います。他にもあります。劇中の並び方や人ととの距離が日常生活にそのまま当てはまるわけではありませんが、少なくとも相手に不快な印象を与えないような距離を取ることが必要であること、そしてその距離の自然な取り方は劇を通して知ったように思います。合唱では、歌っているときの表情を指導されます。写真撮影で「はい、笑って！」といわれることが

ありますが、どこに力を入れていることが笑った顔になっているのかは教えられないと分かりません。「自然でいいよ」なんてことを言う人もいますが、私にとってその言葉はかなり無責任に感じてしまいます。年を重ねればかなり親しい間柄でもない限り、「その表情いいよ」とか、「その顔おかしいよ」なんてことは、誉め言葉として掛けられることはあっても、事実として伝えられることはあります。このようなことは弁論大会でもよい経験となりました。学芸会、文化祭で劇を経験したことは、分かりやすく相手に自分の意思を伝えるには、声の大きさ・話し方・表情や身ぶり手ぶりも時には大切になるということを知る貴重な体験となりました。普通科や専攻科では劇以外の企画も経験しました。ピザ屋さん、あん摩コーナー、バンド演奏など、仲間と意見を交わしながら、より盛り上がるためのアイディアや本番までの練習は大きな力となりました。

少しこじつけのような表現もありましたが、私たち視覚障がい者にとって見て学ぶ・知ることは難しいです。私たちが理解できるように画像を編集し直していただきたり、文字を拡大したりフォントを変更したり、時には直接手や足に触れながら説明したりしていただけることは非常に大切です。また私たちがそれを理解して、実際のスキルになるまでには非常に時間がかかります。「そういえば家族も先生たちも、お互いに話しているときにこんな風だったな」というように、周囲の状況を見かけてから参考にすることもあります。障がいを理解して、適切に対応してくださる社会が作られています。しかし、健常者の人数に比べれば障がい者の人数、中でも視覚障がい者はかなり少人数です。私たちを理解していただくことは必要ですが、私たちも健常者の皆さんに誤解がないように場に応じた適切な振る舞いができるようなスキルを身に付けていくことが、社会の一員として生きていくためには必要となるのでしょうか。



【在学中のアルバイトについて】

進路指導主事

本校高等部では、在学中のアルバイトを原則禁止としています。しかし経済的な事情等でやむを得ない場合に限り、校内審議を経て条件付きで認めています。ただし、障がい者手帳を所持している生徒が在学中にアルバイトを行う際は、雇用上、特別に注意しなければならないことがあります。

企業で働く人の雇用形態の呼び名には、[正社員]、[準社員]、[契約社員]、[嘱託社員]、[アルバイト社員]、[パート社員]など、その事業所により様々な任意の呼称が付けられています。そして、これらは雇用契約を結んだうえで“職”に“就”くため、法令上はすべて“就職”として扱いになります。たとえ週に一度の短時間アルバイトであっても、就職としての雇用に変わりはありません。

そして、企業や治療院をはじめとした事業所には、障がい者の雇用を行うことで、様々な助成金が交付されます。このお金は職場環境等を改善することで障がい者の雇い入れを増やし、職場定着を図る目的で準備されるものです。

ただし、この助成金が事業所に支給されるためには、いくつかの条件があります。特に大きな助成金額を占める「特定求職者雇用開発助成金(※)」については、同一の事業所において同じ障がい者の3年以内の再雇用には適用されません。さらに資本提携のある企業やグループ会社等の関連企業についても1年以内の転職雇用には適用されません。

具体的な一例として、高等部2年時にコンビニエンスストア[ミニストップ]で一度でもアルバイトをした経験がある場合、同じイオングループの[ウェルシア薬局]、[マックスバリュ]、[キャンドゥ]、[シミズ薬品]、[イオンモール]、



[イオン銀行]、[FeliCa]、[未来屋書店]、[MEGA スポーツ]、[リフォームスタジオ]、[トップバリュ]…など、300を超えるグループ会社(及びその何十倍もの関係会社)で高等部3年時に雇用契約を結ぼうとしても、すでに関連会社でその生徒の雇用実績があるため、基本的に「特定求職者雇用開発助成金」は雇用予定の会社には支給されません。たとえ在学中のアルバイトが、障がい者雇用でなくとも同様のルールになっています。その結果、障がい者雇用としての採用が困難になるケースがあります。

※ 特定求職者雇用開発助成金とは、高齢者や障がい者をハローワーク等の紹介により、一定期間継続して新規雇用する事業主に対して支給される助成金のこと。例えば短時間労働以外で、身体障がい者手帳1級、2級所持者を雇用した場合、最初の3年間に240万円が企業に助成されます。(会社の規模や障害等級により助成金額は変動します)

在学中のアルバイトについては、経済面に関するメリットはありますが、その反面デメリットとして学業と両立することの難しさや、卒修時における障がい雇用先の範囲を狭めてしまう可能性があります。これまで何度も何度か同様の相談がありましたが、アルバイトをしようとする際は上記のことを踏まえたうえで、その必要性を含めて慎重に検討しなければいけません。

追伸:今回の記事の挿絵は、生成AI(人工知能)を使って某アニメ風に描いています。いくつかの指示のもと、文面に合わせてAIが自ら考えて作成しました。次回は「AIがもたらす視覚障がい者の未来の仕事」についてお伝えしたいと思います。

